



# みどりの風

平成28年9月1日発行  
校報 第533号  
(みどりの風 第76号)  
練馬区立関町北小学校

## 「LES HERITIERS (受け継ぐ者たち)」を観て

校長 大野 泰弘

「教員歴20年。教えることが大好きで、退屈な授業はしないつもり。」と自己紹介をして、高校1年生の前に立った一人の教師。その名は、アンヌ・ゲゲン先生。フランスはパリ郊外のクレティユ市にあるレオン・ブルム高校に勤務する、歴史を教える女性の先生です。

ゲゲン先生は、今夏に上映された実話に基づく「奇跡の教室 - 受け継ぐ者たちへ -」(原題 LES HERITIERS)というフランス映画の主人公です。アリアンヌ・アスカリッドさんが演じる、歴史教師:アンヌ・ゲゲン先生(モデルになった先生のお名前は、アンヌ・アングレス先生と言い、今レオン・ブルム高校で教鞭をとっていらっしゃるそうです)は、とても厳格でありながら、生徒に対する深い愛情をもち、揺るがない精神力をもって、生徒一人一人に自信を与え、一人前の人間として自らを認識させることのできる、懐が深く、熱意のある驚異的な先生なのだそうです(アスカリッドさん談)。

そのゲゲン先生が勤務するレオン・ブルム高校には、民族的・宗教的・文化的な背景が異なる生徒がたくさん在籍していて、日ごろから些細なことでも対立や差別・偏見があり、担任をする先生の苦労は、我が国とは比較ができないほどとのこと。実際、ゲゲン先生が担任したクラスでも、ゲゲン先生ご自身の御母堂様のご葬儀で不在となった期間中には、休学処分になった生徒が2名も出るほど、クラスは荒れてしまいました。

やがて、そのクラスに戻ってきたゲゲン先生が行ったこと。それは、生徒たちを叱りつけるのではなく、心が荒んでいる生徒に向かって「全国歴史コンクールに応募し、入賞する」という目標を提案したのです。そして、そのテーマが「ホロコーストにおける子どもたちと青少年」というものでしたが、複雑な問題を抱えている生徒の中には、意欲をなくし、反発する生徒も出てきたのです。

しかし、そんな生徒の心に灯を点し、クラスの雰囲気を変えたもの。それは、ゲゲン先生がゲストとしてお連れした、アウシュビッツ収容所の恐怖を体験しながら生き抜こうとする強い気持ちをもって生還されたレオン・ズイゲルさんという歴史の生き証人の証言でした。生徒たちは、涙を流しながらそのお話を聞くと、やがて、眼の色を変え、それまで抽象的にとらえていた史実を様々な視点からより深くとらえるように変貌していったのです。このコンクールは、生徒に「物事を探究する楽しさ」を伝え、歴史を知ること、学び考えることが人生をよりよく変えていく、未来を変えるエネルギーになるということを教えたのです。それがゲゲン先生のねらいでもあったのでしょ。

フランスは「議論の国」と言われるほど、幼い頃から哲学的な問いを子どもたちに投げかけ、話し合いをさせるのだそうですが、このクラスの生徒たちも、ゲゲン先生とともに議論を重ね、歴史の裏に隠された真実を追究していくことにより、結果として、コンクールで優勝するという成果を上げ、一人一人の人生を大きく変えるきっかけにしていきました。

監督のマリー＝カステューユ・マンシオン＝シャルさんは、「私たちの後継者に何を残すのか、歴史の遺産をどのように扱っていくのか、そして、何を守るのかを考えなければならない」と述べていますが、この映画は、教師が誠実さと情熱をもって子どもたちに接し、生きる指針や判断等の根拠を示していかなければならない、教師が子どもたちによりよい人生を構築させる力を与える存在として、その可能性を信じていかなければならない、そのような教師像も教えてくれているように感じられました。

さて、本日より、練馬区の新たな3学期制における第2学期が始まりました。ゲゲン先生は、史実をもとにその歴史の裏に隠された真実や置かれた立場による物事の見え方・感じ方の違いなどを教えるとともに、学ぶことの楽しさを生徒たち一人一人に伝えていきましたが、今を生き抜き、将来に向かってその可能性を伸ばそうとする本校の子どもたちのためには、私たち教師一人一人がゲゲン先生(アングレス先生)の情熱等に学びながら、より高い専門性とより深い信頼関係を築いていかなければならないとあらためて考えています。

2学期は、冬季休業日を迎えるまで、子どもたちにとって学校で生活する時間が最も長くなります。教育という崇高な営みを通して、子どもたちとのゆるぎない信頼関係を築きながら、子どもたちに伝えていくこと、受け継いでいってほしいこと、残していきたいこと等々を大切にしていきたいと思えます。

引き続き、保護者の皆様、地域社会の皆様のご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。